

Title	韓国におけるモンテッソーリ教育法の受容に関する研究： 幼稚園政策を中心として
Sub Title	
Author	李, 善玉(Ri, Zengyoku)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1998
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.48 (1998.), p.35- 39
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告：博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000048-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学 事 報 告

博 士

教育学博士（平成 10 年 6 月 10 日）

甲 第 1651 号 李 善玉

韓国におけるモンテッソーリ教育法の
受容に関する研究
——幼稚園政策を中心として——

〔論文審査担当者〕

主査 慶應義塾大学文学部教授・
大学院社会学研究科委員

教育学修士 田中 克佳

副査 上智大学名誉教授・

日本モンテッソーリ協会会長

M. A. (デトロイト大学)

Klaus Luhmer S. J.

副査 関東学園大学教授

Ph. D. (ケルン大学) 江島 正子

副査 慶應義塾大学教授・

大学院社会学研究科委員

教育学修士 舟山 俊明

内容の要旨

本論文は、「現今の韓国幼児教育界におけるモンテッソーリ・ブームに鑑み、『モンテッソーリ教育法』の受容の歴史に関心を寄せつつ、韓国における幼稚園教育政策史と、その背後にある社会的要求及び哲学的・心理学的教育理論を探り、今日の幼稚園教育政策を『モンテッソーリ教育』の観点から批判的に吟味すること」を研究課題とする。

この課題を実現するために筆者は、まず、「モンテッソーリ教育」理論の基本的な理解から始め、次に韓国における幼稚園教育の歴史と現状の理解を求めて「幼稚園に関する規程」の成立と変遷、それらが韓国の幼稚園教育に与えた影響を考察し、この作業を通して、韓国の幼稚園教育史の背後に作用した哲学的・心理学的教育理論や社会情勢を探っている。これらの準備の後、韓国幼児教育界へのモンテッソーリ教育法の受容過程を探り、また、今日の韓国幼児教育界を規定する「第 5 次幼稚園教育過程」をモンテッソーリ教育の基本理論に照らして考

察し、韓国の幼児教育界現場に理論的・実践的知識を提供し、さらに今後の韓国の幼稚園教育にモンテッソーリ教育法が寄与しうる提言を試みている。

本論文の構成は、次のようである（章節を中心に若干表記を変更。各章末の註は略）。

序 章 1. 研究主題設定の意図 2. 先行研究の概観
3. 研究の課題と方法

第 1 章 モンテッソーリの教育理論

第 1 節 モンテッソーリの生涯

第 2 節 モンテッソーリの科学的教育学

第 3 節 モンテッソーリの子ども観 (1. 注意力の集中
2. 敏感期 3. 正常化)

第 4 節 モンテッソーリ・メソッド (1. 実際生活の練習
2. 運動教育 3. 感覚教育 4. 知的教育)

第 5 節 モンテッソーリの科学的教師 (1. 科学的教師
の意味 2. モンテッソーリ教師の役割)

第 2 章 韓国の幼稚園政策史

第 1 節 幼稚園に関する規程 (1890 年～1945 年)

第 2 節 幼稚園に関する規程 (1945 年～1996 年)

第 3 章 韓国におけるモンテッソーリ教育法の受容史

第 1 節 1910 年代を中心にしたモンテッソーリ教育
法の受容の問題

1. 梨花幼稚園 2. モンテッソーリ教育法の
受容に関する問題

第 2 節 1970 年代を中心にしたモンテッソーリ教育
法の受容の問題

1. 外国人による導入過程 2. 韓国人による
普及活動

第 3 節 モンテッソーリ教育に関する研究及び文献的
状況ならびに研究状況の分析

1. (略)学位論文 2. (略)学術誌掲載論文
3. (略)刊行文献 4. (略)研究状況の分析

第 4 節 モンテッソーリ教師養成機関

1. (略)教師養成機関の類型 2. (略)教師養
成機関における教育課程の運営状況

第 5 節 モンテッソーリ教育法の受容の特徴と問題点

1. 韓国におけるモンテッソーリ教育法受容
の特徴の整理 2. 韓国におけるモンテッ
ソーリ教育法受容上の問題点

第 4 章 第 5 次幼稚園教育課程とモンテッソーリ教育
法の受容の問題

第 1 節 第 5 次幼稚園教育課程とモンテッソーリ教
育法

第2節 第5次幼稚園教育課程の5つの生活領域におけるモンテッソーリ教育法の受容に関する問題 (1. 健康生活領域 2. 社会生活領域 3. 表現生活領域 4. 言語生活領域 5. 探究生活領域)

結章

参考文献一覧

付録 [別冊] (1) 既発表論文一覧

(2) 聞き取り調査資料

(3) 韓国の幼稚園教育課程

各章の内容を簡単に紹介する。

第1章 モンテッソーリの教育理論

子どもは、精神的存在であるがゆえに、本来、自発的活動力をもち、自らの力で成長していく。しかし同時に、その精神は肉体に依存した存在なので、環境との相互作用を通して一切の機能を創造していく。したがって、生命を主とし、環境に従とする生命の外的条件を整える必要がある。モンテッソーリが「子どもの家」で生命のために整えた外的条件は①整備された環境②科学的教具③消極的教師であった。このような外的条件の下で、生命は自己発展の法則にしたがって発展することができ、これによって「正常化」(子どもが作業に集中して自己に潜在する自己成長のための本性を現すこと)された子どもとなる。モンテッソーリが、教育実践に結び付く具体的視点として重視したのは、「注意力の集中」という現象であり、またこれと関連して、ある特定の時期に、ある特別の事物とか知識に特に敏感になる時期を意味する「敏感期」という子どもの発達段階である。とくに、0歳から6歳の間に現れる「敏感期」は、言語・見ること・感情などの外的環境を、意識的・無意識的に吸収する精神力を持っており、この「敏感期」に応じて適切な教具と環境を整えてやることの必要を主張した。

第2章 韓国の幼稚園政策史

1907年12月に「学部官制」が制定され、韓国の幼稚園教育史上初めて政府が幼稚園教育の事務に関わるようになった。その後、1908年4月2日に「高等女学校令」が制定され、高等女学校に付属幼稚園を設立する法的根拠ができ、同7日に「官立漢城高等女学校学則」が制定され、この学則に明示された幼稚園に関する条項が一つの規準となって、その後の幼稚園の開設・運営に大きな影響を与えた。

1910年以後の韓日併合以後、韓国の幼稚園教育は、日本の植民地教育政策によって大きな影響を受ける。伝統的な教育機関である書堂とか私立学校に子どもを通わ

せて日本の同化教育政策に抵抗した韓国人たちは、官の干渉の手薄な幼稚園教育に民族教育の拠点としての大きな関心を示した。1920年代以降、救国のための民族教育運動の一環として多くの幼稚園が設立され、民族愛国教育が行われた。

その一方で、アメリカ宣教師たちが中心となって、多くの近代的な幼稚園が設立され、子どもの遊びを通して知識の基礎となる知的訓練とよい習慣態度の育成を図る「子ども中心の教育」が行われた。

1945年8月に日本から独立した韓国は、1948年に民主主義を建国理念とする大韓民国政府を樹立する。1949年12月に教育法(法律第86号)が制定・公布され、その第146条・第147条・第148条において幼稚園教育の目的・目標・対象が規定されたが、教育内容は、従来のものがそのまま踏襲されたため、幼稚園現場は、遊戯と歌、童話やお話、お絵描きや折り紙が主な教育活動となった。

このような状況の中で、1969年に最初の「幼稚園教育課程」(第1次)(文教部令第207号)が制定された。これは、健康・社会・自然・言語・芸能の五つの生活領域から構成されていた。この「幼稚園教育課程」は、その後、1979年(第2次)・1981年(第3次)・1987年(第4次)・1992年(第5次)の4回に互って改訂されることになる。

各教育課程の特徴を述べると、

①1969年の教育課程は、生活領域別に編成され、全人教育・児童の興味・経験・生活を中心とする「経験中心教育課程」を標榜するものであった。

②1979年・1981年・1987年の教育課程は、発達領域別に構成された「学問中心教育課程」を標榜するものであったが、教育方法としては、全人教育・興味・経験・問題解決能力・個別性・生活中心・自由・主体性などを志向するものであった。

③1992年の教育課程は、基本生活教育・幼児の要求と興味中心の教育・遊び中心教育・全人教育などに重点を置いた、「経験中心・子ども中心の教育課程」を標榜するものであった。

以上のように、4回に互って改訂された「幼稚園教育課程」は、その時代の哲学的・心理学的理論及び社会的要求を反映して多様に変化して来た。すなわち、

①1969年の「第1次幼稚園教育課程」は、デューイの経験中心の教育哲学の影響を受けて成立したものである。

②1979年の「第2次幼稚園教育課程」は、ピアジェの

認知発達理論を受容して成立したものである。

- ③1981年の「第3次幼稚園教育課程」と1987年の「第4次幼稚園教育課程」は、高度産業化・情報化時代になりつつある社会的状況を反映して、学問探究的な教育課程の性格を持って成立したものである。
- ④1992年の「第5次幼稚園教育課程」は、1980年代から深刻な社会問題として台頭してきた非人間化・人間疎外現象などに対処するために、人間教育の強化への要求を反映して成立したものである。

第3章 韓国におけるモンテッソーリ教育法を受容史
モンテッソーリが、ローマの「子どもの家」で彼女の教育法を適用して大きな成功を収めていた時(1907)、アメリカでは形式化・固定化されたフレーベル主義幼稚園への批判が始まり、独自の幼稚園制度と形態を定着させようとする幼稚園教育の変革期を迎えていた。このような時期に、モンテッソーリ教育法がアメリカに紹介された(1909)、モンテッソーリ・ブームが起こった。しかし、やがて、モンテッソーリ教育への批判が活発となり、1914年を境にアメリカにおけるモンテッソーリ教育運動は衰退していく。

以上のようなアメリカにおけるモンテッソーリ教育運動の動向は、韓国の幼稚園設立に多くのアメリカ人宣教師たちが関与していたにもかかわらず、全く伝わらなかった。1910年代にアメリカ人宣教師たちによって設立され、もっともアメリカ教育思想の影響の大きかった「梨花幼稚園」を例に、そのあたりの事情を探った結果は次のようである。

- ①時期の問題：梨花幼稚園が設立された1914年は、アメリカでモンテッソーリ・ブームが衰退し始めていく時期であった。
- ②人的問題：梨花幼稚園の教師たちが学んだ当時のコロンビア師範大学は、進歩主義幼稚園運動のメッカと言われ、デューイ、ソーンダイク、ヒル、キルパトリックなどの進歩主義教育者たちが活躍していた所であり、特に、キルパトリックは、1914年に『The Montessori System Examined』を発表してモンテッソーリ教育法を厳しく批判し、その後のモンテッソーリ教育運動衰退に大きな影響を与えた。もっとも、その後のアメリカでは、1960年代から登場し始めた認知発達理論と共に、1920年代半ば以後ほとんど忘れられていたモンテッソーリ教育がリバイバルすることになる。

韓国では、1970年代からピアジェとブルーナーの認知論が台頭し、子どもの認知発達に関心が集まる中で、

1979年に告示された「第2次幼稚園教育課程」では、認知発達領域が加わるなど認知主義的幼児教育理論が重視されたことにより、次第にモンテッソーリ教育への関心が高まっていくことになる。というのは、モンテッソーリ教育法は認知発達理論に基づく一つの教育プログラムと位置づけられて紹介されたからである。とくに、「第2次幼稚園教育課程」の認知発達領域に紹介されている高度に抽象化された教育内容を教育実践上どう具体化していくかに戸惑っていた現場の教師たちに、実践上の手引きを提供すると受け止められ、多くの幼稚園でモンテッソーリ教育法が実施されるようになり、1980年代にはモンテッソーリ教育プログラムに関する研究が盛んに行われた。

ところでこの、韓国にモンテッソーリ教育法が初めて導入された時期については、比較的近年の出来事であるにもかかわらず、これを特定できる文献資料がない。先行研究についての研究でこの事実に行き当たった筆者は、いわば受容の「担い手」であった韓国人留学生や幼稚園創設者、幼稚園教師たちに聞き取り調査を試みることでこの部分の空白を埋める努力をしている。

その成果として明らかにされた導入時期として1968年という時期が特定されている。それは、エン・ケイシーというアメリカ人の宣教師が「ソウル国際幼児学校」で、モンテッソーリ教育プログラムを実施したことによる。その後、1972年に「雲見幼稚園」・1973年に「ノートルダム幼稚園」「烏山幼稚園」などで、モンテッソーリ教育プログラムが導入され実施された。今日のモンテッソーリ教育法の普及は、1970年代後半から始まった韓国人たちの普及活動による。とくに、全英順などは、日本の上智大学付属「モンテッソーリ教員養成コース」でモンテッソーリ教育を学んで帰国し、「韓国モンテッソーリ研究会」を結成して、巡回講演を行うなど、旺盛な普及活動を展開した。

次いで本研究は、モンテッソーリ教育普及に関連する研究と実践の状況についての研究を試み、次のような指摘が行われている。

モンテッソーリ教師養成は、主に外国で学んで来た人たちが運営する私立のモンテッソーリ教師養成機関と、2年制の専門大学を中心に行われて来たが、1994年からA. M. I. (Association Montessori Internationale) 公認の「韓国国際モンテッソーリ教師トレーニング・センター」が設立され、韓国内でも国際モンテッソーリ教師の免状(ディプロム)が与えられるようになった。

モンテッソーリ教育に関する研究は、1980年代から

活発に行われるようになるが、その大部分が実践書とか概説書であって、研究書は主に修士論文とか学術誌に載っている紀要論文が大半であり、この状況は現在も変わらない。

さらに、以上のような特徴は、以下に示すような韓国におけるモンテッソーリ教育法の受容上の問題点にもつながっていると指摘されている。すなわち、

- ①モンテッソーリ教育の理論的研究の欠如。
- ②幼稚園現場での、モンテッソーリ教育プログラムの断片的適用、モンテッソーリ教具の効用面のみの強調。
- ③モンテッソーリ教師養成の主体は2年制専門大学であり、教育理論の教授と実践教育の時間が不十分。私立の機関では実践教育中心となっている。
- ④モンテッソーリ教師を養成する教師たちの背景や教育機関の質的水準が多様で、様々な教師系列・質の差が現れるなど、一貫した教師養成教育が行われていない。

第4章 第5次幼稚園教育課程とモンテッソーリ教育法の受容の問題

こうして、1997年に公布された今日の韓国の幼稚園政策である「第5次幼稚園教育課程」(以下「課程」と略記)について、モンテッソーリ教育理論の立場から①子ども観②教育観③教師観④生活領域別教育内容(〈健康生活領域〉〈社会生活領域〉〈表現生活領域〉〈言語生活領域〉〈探究生活領域〉)の項目をたてて比較検討し、「課程」で不明確な実践上の手がかかりや理論上の問題にモンテッソーリ教育理論が寄与しうると考えられる提言を試みている。

〈健康生活領域〉を例に紹介すると——「課程」は、日常生活の中で自然に健康生活習慣及び態度が育成されることを重視し、さらに、子どもの精神と身体の発達のために、基本的感覚運動機能を細分化して、それが後の知的能力の発達につながるように配慮している。この点で、モンテッソーリ教育法の「日常生活の練習」プログラムが子どもの敏感期に合わせて多様な基本的運動を取り入れている点、また「感覚教育」プログラムが五感の洗練とともに知性の活性化を図っている点など、寄与できるものがある。——といった具合である。

このような比較検討の後、最後に、今日の韓国の幼児教育界における「モンテッソーリ教育法」の受容の在り方に関して、上記のモンテッソーリ教育に関わる先行研究や実践、モンテッソーリ教師養成の現状研究を踏まえて、

①モンテッソーリ教育思想の体系的で総合的な研究の必要。

②モンテッソーリ教師養成機関を統括する「韓国モンテッソーリ協会」の設立の必要。

③モンテッソーリ教育の実施園や実践家は、教具が手段に過ぎないことを認識して、これを過度に強調する態度を改めること。

といった提言が試みられている。

結 章

以上のまとめと今後の課題などが述べられている。

本論文の特筆すべき点と今後の研究課題

本研究は、韓国における幼児教育への関心から発した理論的・歴史的研究である。モンテッソーリ教育理論に関心を持って研究を始めた筆者は、近年の韓国のモンテッソーリ・ブームに焦点を合わせて本研究を試みている。

筆者のアプローチ法は、まず、モンテッソーリ教育理論の理論的研究と韓国幼児教育政策史、ならびに背後にある社会的要求および哲学的・心理学的教育理論を探り、ついで、韓国におけるモンテッソーリ教育の現状についての研究レベルと実践レベルでの調査分析を行い、この成果を踏まえて独自の研究課題——それは、一つは、韓国におけるモンテッソーリ教育法導入の時期と事情、関連する理論的問題の解明の問題。もう一つは、上記の調査分析の結果見出されたモンテッソーリ教育法への理論的研究不足への啓蒙作業としての今日の幼稚園教育政策に対するモンテッソーリ教育の視点からする批判的吟味の問題。——を設定し、これらを後半部分の研究課題としている。

この研究テーマは、博士論文に相応しい高度の学術研究の対象となる主題であり、教育学分野にとって重要な貢献をもたらすものと判断される。筆者は、この問題に関する先行研究について、すなわちモンテッソーリ教育および韓国幼稚園教育政策に関する文献と資料について徹底的に調査し、適切に整理分析し、それらを踏まえた独自の論述を展開している。モンテッソーリ教育に関する理解、ならびに分析の適確さは、筆者のすぐれた分析能力と鋭い問題意識を示している。

また、モンテッソーリ教育の理論と実践に関する論考を進める上で、筆者は、モンテッソーリの支持派ばかりでなく、批判的な例えばデューイやキルバトリックなどの見解も考察の対象として取り上げるとか、モンテッソーリ教育法の韓国への導入時期に関連して、文献資料の欠如を補うために、受容の「担い手」たちへのインタ

ビューによる資料蒐集を試みるなど、研究手法の適切さに示された筆者の見識と研究能力は高く評価することができる。加えて、モンテッソーリ法の理論的研究と現行韓国幼稚園教育政策との比較検討は、現場での実践に多くの指針を提供するものとする事ができる。

また、モンテッソーリ教育法の導入から定着へ向けての韓国幼児教育界の今後の課題に、一方で教育理論としての普遍性の要求と、他方で韓国の置かれた歴史的・文化的状況という個別性との間に起こる葛藤に着目しつつこれを行おうとする筆者の提言姿勢には、批判的スタンスと現実的バランス感覚の見られる研究者の姿勢として評価することができる。

ただし、実践への提言は、研究というレベルを超えた特定価値の提示であり、研究上の価値について評価が分かれる問題も含まれる。この点での自覚が必要であろう。また、筆者の韓国幼児教育界への提言は、そのまま筆者の今後の研究課題・実践課題でもある。これらは、今後の精進の待たれる問題である。

審査結果の報告

今後に期待される多くの課題はあるが、本論文は、韓国幼児教育の歴史的・理論的研究として独自の寄与を持つものであり、実践上の示唆にも富んでいる。また、韓国へのモンテッソーリ教育法導入時期の特定研究に見られる独自の研究方法の工夫に例示されるように、自立の研究者としての力量や見識も十分に認められる。以上により、本論文が博士（教育学）の学位を受けるにふさわしいものであると判断する。

心理学博士（平成 11 年 2 月 22 日）

甲 第 1696 号 桐谷 佳恵

アモーダル完結についての実験現象学的検討
——因果関係の知覚を通じて——

〔論文審査担当者〕

主査 慶應義塾大学名誉教授・
(元大学院社会学研究科委員)

文学博士 古崎 敬

副査 慶應義塾大学文学部教授・
大学院社会学研究科委員

文学博士 小谷津孝明

副査 慶應義塾大学商学部教授

文学博士 狩野 千鶴

副査 千葉大学工学部教授・

自然科学研究科教授

文学修士 野口 薫

内容の要旨

本論文では、運動構造のアモーダル完結を通じて、知覚世界の実験現象学的検討を試みた。まず、第 1 章では、アモーダル完結や因果知覚と称される知覚現象についての従来の研究を紹介すると共に、G. Kanizsa や A. Michotte という非ドイツ語圏の実験現象学者の研究哲学を振り返り、本研究の意義を明かにした。第 2 章では、続く本実験で操作する変数を決定するため、予備実験を行い、問題の所在を実験的により明確にした。第 3 章では大きく分けて 3 つの実験を行い、運動構造のアモーダル完結という現象の理解を深めた。第 4 章では、前章の実験結果から生じた疑問を解決するために、補足実験を行った。第 5 章では、実験全般について考察を行い、続く第 6 章では、この現象の検討を通じて、われわれの知覚について何をいい得るのか、総合的考察を行った。なお、最終章である第 7 章には引用文献をまとめ、さらに、本論文で重要な位置を占める現象については、用語集を本文とは独立してまとめた。

本論文で扱うアモーダル完結や因果知覚と称される現象は、われわれの日常生活の中に偏在しているものである。たとえば、机の上に本が置いてあると、机はその一部を本によって隠されており、その部分は直接見られない。しかし、われわれは、机に空虚な穴が空いているとは感じない。本の下にも、机は、続いて存在していると見られる。このように、ある対象が別の対象によって一部を隠されながらも、全体像が知覚される現象をアモーダル完結という。その場合、一部が隠されて見える対象のその隠されているとされる部分は、直接見ることができない。これが、「アモーダル」と称される由縁である。また、完結という現象には、複数対象の層化あるいは重なり合いが見られるのも特徴である。一方因果知覚とは、複数の事象間の関係、特に原因と結果の関係を捉えることで、これは、過去経験等の介在なしに成立する直接知覚であると考えられている。つまり、アモーダル完結も因果知覚も、純粋に知覚的な現象であり、知覚心理学こそが扱う現象の類のものなのである。

ところでアモーダル完結は、静止事態にのみ見られる現象ではない。一部を隠されながらも単一対象の連続運動が知覚される現象は、トンネル効果と呼ばれる。しか